

# 琉球大学学術リポジトリ

## 土壌よもやまばなし（1） —ジャーガルの語源を探る—

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): ジャーガル, 語源, 土壌分類, 沖縄古来, 方言, 光沢 キーワード (En): 作成者: 永塚, 鎮男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015676">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015676</a>

# 土壌よもやまばなし①

—ジャーガルの語源を探る—

永塚 鎮 男

(有限会社 日本土壌研究所)

Shizuo NAGATSUKA: Various topics of the soil.

— Investigation of the origin of Jargal —

## 1. はじめに

人類と土のかかわりの歴史において、昔の人達がどのように認識し、どのように名付けてきたかを知ることは、土壌生成分類学（ペドロロジー）において基本的に重要なことである。

世界各地に分布するいろいろな土壌には、それらが分布する地域の農民たちによって古くから呼び慣らされてきた、きわめてユニークな方言名をもっているものが多い。それらの中にはポドゾル、チェルノーゼムなどのように土壌学の専門用語として採用され、現代の土壌分類体系における学名として用いられているものさえある。

たとえば、「ポドゾル」という名称は、ロシアの農民の間で古くから使われてきた俗語で「灰のような土」（ロシア語でポド＝下、ゾラ＝灰を意味する）を意味し、森林火災の後に生じる木灰の下の不毛な砂礫質の土をさしていた。その後V. V. ドクチャエフ（1870）が堆積有機物層の下に見られる灰白色に漂白された層位をさす述語として採用して以来、このような漂白層をもつ土壌の名称として広く土壌学において用いられるようになったものである（大羽・永塚，1988）。

我が国でも、沖縄本島北部の山地（山原）<sup>やんばる</sup>にみられる、漂白層をもった赤黄色土に対して、

「フェイチシャ」という沖縄の方言名が与えられている。「フェイチシャ」は沖縄本来の発音「フェイチチャ」を本土の研究者たちが「フェイチシャ」と記載紹介して以来広まったもののようで、沖縄方言で「フェイチチャ」と呼ばれると言うのが正しい。沖縄の方言では、フェイ＝灰、チャ＝土を意味し、したがってフェイチチャ＝灰土ということになる。ポドゾルの漂白層と灰白化赤黄色土（フェイチシャ）の漂白層とは成因的に全く同じものではないが、形態的には非常によく似ている。このような形態的類似性について、ロシアの農民も沖縄の農民も共通して「灰」とみなした点はきわめて興味深いことである。

ところで、沖縄には古来から沖縄方言による土壌分類があり、土壌や母材の方言名は今日でも広く一般に用いられている（表1参照）。この土壌分類体系は18世紀の蔡温時代<sup>さいおん</sup>からのものと考えられているが、これらの土壌や岩石の沖縄方言名のなかには、上に述べたフェイチシャ（フェイチチャ）の場合のように、沖縄方言を標準語に翻訳することによってその語源を理解することが出来るものもあるが、ジャーガル・ウジマ・カニクなどのようにその語源がはっきりしていないものもかなりある。

これらの沖縄方言による土壌名のうち、この

表 1. 現代の土壌分類と沖縄古来の土壌分類の対比 (永塚, 1985を一部追加修正).

	土 壌 クラス	土 壌 型 <sup>a)</sup>	亜型以下の細分	特 徴	地力保全基本調査の分類		
					県 土 壌 統	土壌群	
成 帯 性 土 壌	鉄珪酸アルミナ質土壌	赤黄色土 (国頭マージ)	赤 色 土	赤色、強酸性、養分に乏しい。 侵食されやすい。	具志堅、南区、中川、慶佐次、 大里。	赤色土	
			黄 色 土	黄色、強酸性、養分に乏しい。 侵食されやすい。			阿陀尼原、北区、開南、屋良、 安田、川平、古宇利、カーラ岳、 登野城、仲地、長間、北帆安。
			灰白化赤黄色土 (フェイチシャ)	灰色、強酸性、堅蜜。			
成 帯 内 性 土 壌	石灰成土壌 (島尻マージ)	テラロッサ様土 (赤土マージ)		暗赤褐色、石灰岩台地上に分布。	糸州、儀間。	暗赤色土	
		テラフスカ様土 (黒土マージ)	典 型 的 斑 紋 型	褐色、中位段丘下位面に分布。 褐色、マンガン斑に富み、 中位段丘上位面に分布。	多良間、マイザク原、並里、 下田、勢理客。		
		レンジナ様土	(石粉マージ) (砂地マージ)	サンゴ石灰岩の破片を混ず。 砂質、砂は主として石灰よりなる。	真栄里、摩文仁、浜崎、前泊。		
	ヴァーティソルまたはペロソル	非成帯性土壌	(アカジンネ)		赤色味が強く、理化学極めて不良。	稲峰、伊集。	灰色台地土 (石灰質)
			(アカムチャー)		帯赤灰色、粘性極強、透水性不良。		
			(カタマリ)		淡灰色、乾燥すると硬い土塊 になる、粘性中。		
			(シラチチ)		灰白色、粘性少、理化学良、 生産力大。		
			(ヤワラミ)		淡灰色、粘性少、透水性良、 柔らかい、生産力極めて大。		
			(ウルジャーガル) (ジャーガルマージ)		サンゴ石灰岩の破片を含み、 理化学良、生産力やや大。 ジャーガルとマージの混合し たもの。		
	未発達土壌	ランカー (ウジマ)			鮮新-更新統砂岩の風化土壌。	屋宜原。	黄色土
		ポロウィナ様土 (黒砂地)			腐植に富む石灰質砂。		砂丘未熟土
	低地 土壌		(カニク)		砂質の土壌。	屋部。	褐色低地土 (中粗粒質)
	非 成 帯 性 土 壌	未熟土壌	リソゾル	サンゴ石灰岩 リソゾル	最低位段丘上に分布。		岩屑土
リソゾル (白土)				ヒン岩、長石質砂岩の風化物。			
レゴソル		石灰質レゴソル (白質砂地)		石灰質の砂粒を含む白い砂。	名城統。	砂丘未熟土	
		レゴソル (砂地)		非石灰質の砂。			

<sup>a)</sup> ( ) 内は、沖縄古来の土壌分類による名称。

たび、「ジャーガル」の語源について、土壤学の面からいささか納得の行く推論が得られたので、大方のご批判をいただきたく、それを紹介させていただくことにしました。

## 2. ジャーガルの語源を求めて

沖縄の方言で「ジャーガル」と呼ばれる土壤は、新第三系島尻層群中の青灰色をした泥灰岩（沖縄の方言でクチャという）からできた未熟な土壤で、pH8前後のアルカリ性反応を呈し、遊離の炭酸カルシウム含量は12%に達し、希塩酸で激しく発砲するなどの性質があり、現在の土壤分類では石灰質灰色台地土、石灰質陸成未熟土、グルムソル様土型非固結岩屑土などと分類されていることは、ご存知の方も多いと思います。島尻層群泥灰岩をクチャとよぶのは、ク＝固い、チチャ＝土という沖縄の方言からクチチャ＝堅い土がなまってクチャとなったといわれています。乾いた泥灰岩の硬さを野外で体験した者なら、誰でもこの説明には納得するであろう。

しかし、ジャーガルがどんな土壤かを説明した記述は多いが、ジャーガルの語源について述べた文献はいくら探しても見つからない。沖縄へ行く度に沖縄の土壤研究者の仲間達に聞いても良くわからないという答えが返ってくるばかりだった。

## 3. 謝茹<sup>ジャーがる</sup>という地名から

沖縄島の北谷町吉原<sup>ジャーがる</sup>に謝茹という集落がある。この集落名とジャーガルが何か関係があるのではないかと思い、地名の由来をしらべてみた。

ここは北谷町中部の沖積低地から琉球石灰岩台地の起伏に富んだ斜面にある。勿論斜面の一部には土壤のジャーガルも分布している。近世末期に開発され、伝道村<sup>でんどう</sup>と桑江村<sup>くわえ</sup>にまたがって集落を形成したが、1940年（昭和15年）に本字伝

道<sup>どう</sup>から行政字謝茹<sup>ジャーがる</sup>として分離独立したとされている（日本歴史地名大系、2002）。したがって、ここの地名は比較的新しく、ジャーガルという土壤の語源に関係するというよりも、逆にここの地名が付近に分布するジャーガルという土壤に由来するものと考えた方がよいようである。また沖縄語の漢字表記は、沖縄方言の発音に類似した音訓の漢字を当てはめたものが多く、したがって、その意味を漢字の意味から類推することはほとんど不可能であるといわれている（宮城、1992）。それゆえ謝茹という漢字表記からジャーガルの語源を類推するのは無理であろう。佐敷町の海岸沿いに兼久原<sup>かにくばる</sup>という地名をもった所があり、ここの土壤は実際に砂質の沖積土壤が分布していた（現在は土地改良によって造成土に変わっている）が、これも「カニク」という土壤が分布していたためにつけられた地名と推定される。

## 4. ジャーガルの本来の発音は「ちやかる」

宮城（1992）の指摘に示唆されて、琉球時代の農書をあちこち調べているうちに面白いことに気がついた。現在われわれはジャーガルと表記したり発音したりしているが、「農業之次第」（著者・成立年代不明）（日本農書全集第34巻、1983）などの古い沖縄の農書では、現在のジャーガルに相当する土を「ちやかる」と表記しているのである。つまり「ジャーガル」の語源を明らかにするためには「ちやかる」と平仮名表記された発音の意味から調べなければならないのである。

私は、国土調査土地分類細部調査の仕事でしばしば沖縄を訪れる機会があるが、そんなある日、那覇グランドホテル地下の松尾亭で沖縄大学の上原先生と泡盛を酌み交わしながら沖縄の地形や土壤について議論していた時に、話がジャー

ガルにおよんだことがある。その時は、ちょうど前述のようにジャーガルの語源解明の鍵は「ちやかる」にあるという考えにたどり着いた直後だったので、その旨を上原先生に話すと、先生は「それはひょっとすると〈おもろ〉と関係があるかもしれませんがね」といわれた。その時は、話はそこまでで終わってしまったが、東京へ帰ってしばらくすると上原先生から大変興味深いFAXが届いた。その内容は大変意味のあるものなので、そのまま紹介することにする。

永塚鎮男 様

前略

かねて、ご連絡申し上げるつもりでした「ジャーガル」の件ですが、遅れて申し訳ありません、すでにご存知とは思いますが、「きやかる」は、岩波書店から1972年に刊行された「日本思想大系18」、外間守善・西郷信綱著『おもろさうし』の17ページ右下に、「今日（けお）の良（よ）かる日（ひ）に 今日（けお）のきやかる日（ひ）に」と出ています。沖縄の方言では「け」と「き」は「ち」と発音します。したがって、これを方言でよむと、「今日（ちゅう）の（ぬ）良（ゆ）かる日（ひ）に 今日（ちゅう）の（ぬ）きやかる（ちやかる）日（ひ）に」となります。意味は17ページの上段にありますように、「今日の良い日（吉日）に今日の輝ける（輝かしい）日（ひ）に」となります。なお、「きやかる」を除き、このようなスタイルは現在でも慶事の挨拶に使われます。

2002年11月29日

上原 富二男

そこで、早速、手元にあった岩波文庫版のおもろさうし（2000）を見てみると第一首里王府の御さうしに出て来るのを初めとして、「今日

の良かる日に 今日（けお）のきやかる日に」という表現は、そこかしこに出てきていることを確認した。つまり、「ジャーガル」の本来の呼び名「ちやかる」は、沖縄の方言の「きやかる」が沖縄語の音韻変化に従って「ちやかる」となったもので、その意味は（輝かしい）という意味なのである。

ジャーガルという土壌の名称の語源が（輝かしい）という意味と関係があるというのは一体どういうことなのだろうか。FAXの内容を読み終えた時ふと私の脳裏にはスリッケンサイドという術語がよぎった。

スリッケンサイドというのは「鏡肌」<sup>かがみはだ</sup>ともいわれ、地質学では断層運動に伴う摩擦のために断層の両側の岩盤上に生じた光沢のある面をさすが、土壌学では、乾湿に伴う土壌の膨潤と収縮による摩擦のため構造面が平滑になり、光沢をもつようになったものをさす術語で、スメクタイトなどの膨潤性粘土鉱物に富んだ土壌に特徴的にみられるものである。ジャーガルに含まれる粘土鉱物は膨潤性のスメクタイト（モンモリロナイト）が大部分を占めているので、早ばつの年には収縮して亀裂を生じて作物の根切れをおこし、多雨時には膨潤して亀裂が閉じるため排水不良となって湿害をおこしやすいことはよく知られているが、このような膨潤と収縮の反復によって、スリッケンサイドができていく場合が多い。おそらく昔の沖縄の農民達は、ジャーガルがもつ物理的特徴の一つとして、このようなスリッケンサイドが示す光沢に気が付いており、このような土壌を「輝かしい光沢面のある土壌」という意味で「ちやかる」と名付けたのであろうというのが、ジャーガルの語源についてのわたくしの推測である。これだけではあまりにもペドロジストの我田引水的な推測に過ぎないと思われる御仁もおられると思うの

で、もうひとつ根拠を付け加えたい。国際的統一土壌分類体系の枠組みとして、第16回世界土壌科学会議（1998, モンペリエ）で採択された「世界土壌照合基準（WRB）（1998）」のなかにニティソル（NITISOLS）という分類単位がある。これはブラジルの構造性テラ・ホーシャで代表されるような、粘土移動が深くまで及んで光沢のある構造表面をもつ土壌をまとめたものであり、ラテン語の *nitidus* = “光沢ある” に由来している。これは、土壌の「構造面の光沢」が土壌の名称の起源になっていることを示す具体的な事実であり、これと同じことが沖縄でおこってもおかしくはない。むしろ、先に述べたポドソルとフェイチシャの漂白層の場合と同じように、ジャーガルとニティソルの場合には、「土壌構造面の光沢」が南米でも沖縄でも共通的に土壌の特徴として認識され、命名の根拠になったという可能性は否定できないのではなかろうか。これらの例は、「同じような状況

下では、人類の土に対する認識の仕方はきわめて共通的である」ということを示しているものと思われる。

#### 参考文献

- 大羽 裕・永塚鎮男 1988. 土壌生成分類学, p.236, 養賢堂.
- 日本歴史地名体系48 2002. 沖縄県の地名, p.365, 平凡社.
- 宮城真治 1992. 沖縄地名考, pp.198, 沖縄出版.
- 日本農書全集 第34巻 1983. p.219-237, 農文協.
- 外間守善校注 2000. おもろさうし（上）pp.501,（下）pp.487, 岩波文庫.
- FAO, ISRIC and ISSS 1998. 世界の土壌資源－照合基準－, pp.149, 社団法人 国際食料農業協会.